

直して使うが江戸文化

エッセイ 大江戸エコロ帖
◆ 第四回 ◆

文 / 石川英輔

最近、ものを修理する機会が少なくなつた。電子装置が増えて単純な故障そのものが減っているだけでなく、保証期間の過ぎた器具を修理するより新品に買い換える方が安く使い勝手も良くなるため、古いのを捨ててしまうからだ。

目まぐるしいほどの速さで新製品を開発して大量に製造販売しないと生き残れない産業構造のせいで、私たちは同じ道具を長く使う習慣を失いかけているが、日本の伝統的な世界では、修理は生産の付録ではなく一つの産業だったといつていいだろう。

この伝統は長く続き、昭和30年代までは修理専門の職人が大勢いたものだ。江戸時代はまださかのぼると、修理ビジネスには今では考えられないほどの広がりがあり、ものを作る職人自身が修理を引き受けるほかに、さまざまな修理業者がいた。

いかにも江戸らしいのは、修理の職人が商

図版 / 街頭で桶の修理をしている籠屋。昔は、後ろに見える道具箱と、籠にする細長い割り竹をかついで町の中を流していた。一時交加より

品も販売する「職商人」という商人で、傘・提灯の張り替え、錠前など金物の修理、そろばんの調整や修理、煙管の詰まりを直す羅宇屋などの職人が、新品の販売や古物の下取りまでを兼ねて町中を往来していた。

もちろん、修理専門の職人も大勢いて、多くは呼び声を上げながら町を歩いて客を探した。鍋や釜などの水漏れを部分的な鑄造によって修理する鑄掛け、下駄の歯をさし替える歯入れ、割れた陶器を修理する瀬戸物の焼き継ぎ、石臼の目立てをする目立て屋など、今では考えられないほど数多くの職種があった。

中でも多かったのが、桶の籠をはめ直す籠屋だった。昔の日本では桶はどこの家にもいくつもあり、修理の需要が多かったからだ。桶は、木の板を竹の籠で円筒状に締めた容器なので、使っているうちに籠がゆるんで水が漏れるようになる。修理は、古い籠を除いて新しい籠を締め直し、板の合わせ目を削り直



すなどして漏れを止めた。これで、古い桶が新品同様に使えるようになったのである。

使い古した道具がこわれると、いちいち修理して長く使っていれば経済は発展しないが、一方では、捨て場に困るほどの廃棄物に悩まされることも、過剰なエネルギー消費による地球温暖化や気候異変の恐れもなく、水や大気の汚染を心配する必要もなかった。

地球上に住む生物として、どちらがまともな生き方なのだろうか。

いしかわえいすけ
作家。著書に、「江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した『大江戸リサイクル事情』」「大江戸えねるぎ事情」などがある。

“使い捨て”しない充電式カイロ



日ごとに寒さが増すこれからの季節、外出時のお供に重宝するのが、携帯カイロ。今までは使い捨てが主流でしたが、この冬からは、繰り返し使える「充電式カイロ」にシフトしてみてもいい。これは、充電式電池でお馴染みの、SANYO「エネルギー」のシリーズで、一度充電すると約5〜7時間、使用できるといふ優れモノ。本年度のグッドデザイン大賞を受賞した、スタイリッシュなフォルムも魅力です。

三洋電機 (電話06-6994-6289) <http://www.sanyo.co.jp/eneloop/lineup/kairo.html>

廃盤になった海図を再利用



海の地図である「海図」は、航海時に欠かせないもの。地形や潮の流れがちよつとも変わるのと事故故につながるため、海図は海上保安庁によって、定期的に改訂されています。その時に出る、大量の廃盤を利用して作られているのが「海図シリーズ」のステイションナリー。バッグ(写真)やレターセットなど、一つひとつ違う図柄が楽しめます。しかも、水に強いという嬉しいおまけ付き!

kurkku design (電話03-5414-6998) <http://shop.kurkku.jp>

エコモノたちで、
あなたの暮らしを
彩りあるものにしてみませんか。

エコモノ

廃材がキーホルダーに変身!



廃棄されたパソコンのキーボードからキーホルダー(写真)を作ったり、中古のタイヤチューブをお財布に作り替えるなど、ユニークなアイデアと、斬新なデザインで人気のリサイクルアイテムブランド「SECCO(セッコ)」。このブランドが生まれたのは、環境大国、フィンランド。できるだけ環境に負担をかけないようにと、手作業で生産されている品々は、どこか温かみを感じさせます。

ピクニック (電話03-3469-1930) <http://www.seccoshop.jp>